

# 九鬼周造とフランス社会学

加藤 正 泰

## 一 はじめに

昭和三十二年七月のある日、私は新聞の広告で岩波から九鬼周造著「現代フランス哲学講義」が出版されたのをしり、早速、行きつけの書店に電話で注文したのであった。

九鬼周造——この名は多くの人々からすでに忘れられていく。彼と私は、いかなる関係にあるのか。彼は私の親友九鬼隆造君の父である。九鬼周造博士には二人の男の子供があり、長男が隆一郎、次男が隆造といった。私の兄が隆一郎君と同級、隆造君は私の一年以上級であったが、年頃が同じなので、大正の中頃から、昭和の初めにかけて、私の幼稚園から、小学校卒業頃までの文字通り竹馬の友であった。

九鬼周造の夫人は、人もしる中橋徳五郎の令嬢で、中橋徳五郎は大阪商船のこんにちを築いた財界人であるばかりでなく、当時、文部大臣として日本中に旧制の高等学校を増設した人である。

私の親友隆造君は、その母親及び兄隆一郎君と一緒に、常に中橋徳五郎邸の一隅に生活していた。東京市麴町区三番町にあつた彼の屋敷や、神奈川県大磯町の山の手の一角を占める別荘の宏大なことは、いまだに私の記憶に彷彿としている。しかし、私はここで、隆造君の想い出を綴るつもりはない。

たゞ、隆造は東大の経済学部を卒業、海軍主計中尉として出陣、駆逐艦主計長として南方で戦死したのであるが、誠に立派な、本当に美しい人物、将来性のある人物であつたこと、いかにもシャープな性格であつたことのみ記しておく。では、私は何故、このように九鬼周造の子供たちや、その生活環境のことを書いたのだろうか。その理由は、こうである。

隆造と私のつきあいは、五、六才頃から約二十年近く続いたのであるが、私は唯一回も、その父に会わなかつたのである。

九鬼周造博士は八年もの長きにわたり、主としてフランスに滞在し、また帰国後は、すぐ京都帝国大学教授にむかえられ、ほとんど東京にはいなかったのである。息子隆造の話では、「ウチのオヤジは本の虫である」ということであつた。隆造のこの言葉は、三十年後のこんにち、手にした「現代フランス哲学講義」を開けて見て、はじめてなるほどと、つくづく感嘆した私である。

およそ、眞の学問の道は、こうしたものであらう。

研究への精進のまえには、家も妻も、子供もなかつた偉大なる九鬼周造の激しい生き方に対して、私は、心から敬意をばらうものである。

## 二 序 論

——こんにち九鬼哲学を顧みる意義

早速、手にした「現代フランス哲学講義」を開いてみるとかつて読んだ「いきの構造」(昭和五年十一月初版)や、「文芸論」(昭和十六年九月初版)の意味が、非常に、はつきりと判つてきた。

私は、こんど出版された書物によつて、九鬼哲学の真髓といわれる「いき」の研究や「文学の形而上学」の哲学的背景を明確に、つかむことができたから。

正直にいえば、「いき」や「文芸」が九鬼哲学の最終目標であることが理解できた、こんにちでも、哲学研究を目指しているのではない私には、九鬼哲学の現代哲学における位置

や、その重要度は、理解しかねるし、また、とくに、それを究めようという考えもない。私は、みずからの社会学研究を目指すとき、九鬼周造のノートから、つぎの言葉によつて、大いに啓発されたのである。

「我々は何等かの意味で現代の問題を捕へなければならぬ。哲学を研究するものは現代の問題に悩むものでなければならぬ。さうして一方に現代の哲学上の問題が哲学史の背景なくしては理解出来ない様に、他方には又現代の哲学問題の理解を有たなければ哲学史の攻究は徒勞である。哲学史を単なる哲学史として研究することは世の好事家に委ねて置けばよい。哲学の学徒は狐に憑かれた者の様に哲学の問題のために病み且つ悩む者でなければならぬ。」(講義二九頁)

「哲学は実に事物の心の鼓動を感じなくてはならぬ。心の鼓動は体験によつて感じられるのである。さうして其感じ方には哲学者の個性が与かるのである。哲学は個性の体験から生れるのである。哲学は固より体験其物ではないが、体験に基いた認識である。偉大なる思想は心から来る。さうして事物の深い心の鼓動と共鳴するには深刻な体験に依らなければ出来ないのである。パスカルは呻きながら索ねる者の外は自分分は承認することは出来ぬといつた。凡そ人間の悩みから生れ、人間の悩みに訴へる哲学でなければ生命を有つた哲学ではない。安価な光と素朴な白昼に安んじて居る者には哲学は生れて来ない。胸に暗黒なものを有つて、暗黒のために悩まなければ哲学らしい哲学は生れて来ない。」(講義三十三—三十四頁)

「現代フランス哲学講義」の序論のなかで、九鬼周造は現代の意義と哲学の概念とを右のようにのべている。そして、このような哲学に対する態度から、彼の哲学の特色であるフランス哲学史研究によつて、その地位を確立したものと理解することができる。

哲学に対する九鬼周造の態度は、社会学を研究するばあいにも的確にあてはまるといつてよい。こんにち社会学研究者の多くは、どこからみずからの研究をはじめているのであろうか。とくに戦後のわが国においては、外国文献は全く手にしないで、ひたすらわが国の社会へ、もっぱら社会調査法によつてアプローチすることのみを考えているようである。かようなわが国の社会学の現状を考えると、私は、九鬼周造の哲学に対する態度を顧みることによつて、みずから大いに反省したいと思う。

なお、以下の引用で（講義）とあるのは、九鬼周造著「現代フランス哲学講義」のことである。

### 三 九鬼周造の科学論

かような私の発想から九鬼哲学を顧みようとするならば、さしあたつてのべる必要のあるのは、彼の科学論についてである。

九鬼周造は、哲学と科学について、つぎのようにのべている。

「凡そ科学は各々其研究に特殊の範圍を有つてゐる。例え

ば物理学は物質の性質を考究するのである。物質の外にも精神といふ現象もあるが物理学はそれには原理上没交渉である。又、物質の中にも生活といふものがあつて、目的觀念によつて説明せらるゝものであるが、物理学は斯かる生活現象は考究しない。若しそれを考究する場合にも、それは単に、物質としての生物であつて、生物としての特徴、即ち目的觀念を捨象して、他の物質と同様のものを仮定した上でのことである。又、物質の性質を考究する學問としては物理学の他にも化学がある。併し化学が何等か特殊の物質的差異を仮定して説明の出来る様な性質を研究の対象とするに反して、物理学は物質の一般的性質を考究する。」（講義二頁）

このように物理学と化学を引き合いにだして、自然科学のばあいにおける研究の特殊範圍についてのべているが、精神科学についても、法学、経済学及び倫理学について「例へば法学は社会の法則を研究の対象としているが、人間社会の生活欲望より生ずる経済活動の法則を考究する経済学とは其考究の範圍を異にして居る。」（同上）

「同じく社会に於ける実践上の規範的法則を考究するとしても、倫理学が良心に關する規定を考究するに反して、法学は単に外部的行為を支配する法則のみを考究の対象とする。」（同上）とのべており、いさゝかフォーマルではあるが精神科学においても、自然科学における諸科学と同様に、夫々、個有の特殊研究領域のあることを主張している。

かような科学に比して哲学はどうかというのに、「哲学に

は特殊の範圍が限られていない」(同上)のであつて、哲学の対象は宇宙全体ということになる。

このようにして九鬼周造は哲学を絶対的學問と呼び、これに対して科学を相對的學問という。

もつとも、九鬼周造の科学論は、ここから出発するのであつて、右の区分のみで終るならば、何もここでとりあげて論ずるまでもなからう。

彼は、まず哲学の概念を明らかにするため、哲学と宗教との關係、哲学と芸術との關係、哲学と道德との關係、哲学と愛との關係をのべ、つぎに、彼の科学論の中核をなす三つの項目について所説を展開している。

その三項目とは、(一) 哲学は諸科学の綜合であるか、(二) 哲学は科学の批判をその任務とするものであるのか、(三) 哲学は形而上学であるのか、の三つである。

#### 四 科学論 (その二)

まづ哲学の概念を明らかにするためにあげた哲学と宗教との關係は、こうである。

九鬼周造は宗教を宇宙への降服と考え、哲学を宇宙への征服と考えた。すなわち、宗教には神があるのに対し、哲学には、もし神の概念に達するばあいがあつても、それは拝礼する神ではなくて、いわば征服の総計であるとする。哲学と宗教との相異は理解と帰依の相異であるといえる。

つぎに哲学と芸術との關係はどうか。哲学の本質が理解と

いうことであるのに対し、芸術の本質は觀賞であり、従つて芸術的価値とは美である。従つて両者は全く異つたものであると考へている。

哲学と道德の關係については、後者を行為と考へることによつて區別している。もつとも、古代ギリシヤのストア派やエピクロス派にとつては哲学は道德であつたのであり、このようならば、哲学が実践的色彩を帯びて両者の區別が不明瞭であることを指摘している。

最後に哲学と愛との關係はどうなつてゐるか。彼にあつては両者は最も本質的類似を示している。すなわち、哲学は元來、知に対する愛を意味するのであつて、いわば欠けているものを求める憧憬である。恋愛も欠けているものを求める憧憬である。哲学にも情緒の悩ましさがつきまとい、男女の愛にも形而上学的背景がある。従つて、本質的に両者は類似している。

では、両者はどこに差異があるのだらう。九鬼は哲学の対象が知識であるのに対し、愛の対象は生きた人間であるとのべている。

右の分析によつて、彼は哲学概念と他の諸概念、宗教、芸術、道德、愛とを區別したのである。

このように、他の概念から明確に區別された哲学が科学に對しては、どのような關係にあるのか。彼の科学論は、私にとつて、きわめて興味のある問題である。

(一) 哲学は諸科学の綜合であるか

科学が特殊の学であり、哲学が普遍的学であるとすれば、哲学の本質は科学の総合ではないのか、九鬼のこれに対する答は、結論を先きに言えば、否である。

この立場の代表はオーギュスト・コントである。十九世紀科学万能の時代、哲学は科学の絶対的權威を承認した結果、哲学自身の存在も危くなつたのであり、総合とは、このばあい合計にすぎないという。

九鬼によれば、かように哲学と科学との差がむしろ量的色彩を帯びてきたとき、今迄攻究されなかつた学問が特に哲学であるかのような觀を呈して來、心理学とか、社会学は、この位置に立つものであると指摘している。(講義十頁)

(一) 哲学は科学の批判をその任務とするものであるのか  
右のごとく、十九世紀のオーギュスト・コントを代表とする哲学を科学の総合であるとする立場と反対の見方が、第二のばあいである。

この見方の代表はシャルル・ルヌヴェイエであり、要するに哲学は根本的学であるという考えに基いて、科学に対する一切の信仰をまず、疑わうとしたものである。殊に、科学に限界を与えようとしたものであり、哲学が、科学の基礎概念の検討によつて、その原理、方法、成果を批判しようとするのである。

この立場にも、九鬼は安住の地を見出さない。

(三) 哲学は、形而上学であるのか

以上の、(一)、(二)の立場を、九鬼は、哲学者として、きわめ

て消極的立場であると考へ、「哲学の任務は果して斯様な消極的なことに止まるであらうか？」と疑問を發している。

彼は第三の立場を最も積極的なものと考へ、科学の総合を哲学とする第一の立場や、科学の批判のみを哲学の全体であるとするのでは満足できず、第一と第二の立場を綜合した彼の目指す新しい形而上学が哲学の本質であると考へる。

要するに、九鬼哲学の体系は、哲学概念の究明にはじまりその科学論によつて、十九世紀の実証哲学の科学万能の主張と、その反動である科学批判の克服によつて、次第に、基礎づけられていつたとみてよいと思ふ。

## 五 九鬼哲学の基礎をなすもの

前項において私は、九鬼周造の科学論のあらすじをのべたが、ここで、あらためて彼の哲学の基礎をなすものについて検討してみたいと思ふ。九鬼哲学は、何といつても、その基礎に、フランス哲学の広大なる理論をもとにしている。私は彼がいかなるフランス哲学史の教養をもつていたかを、あとづけてみよう。

### (一) スコラ哲学

まづ彼は、實在論と唯名論の論争について、九世紀から十五世紀までの中世紀におけるフランス哲学の最も重要なテーマと取組んでいる。

九世紀には、エリウゲナとエーリック・ドーセル。

十一世紀には、ベランジェ・ド・トゥール、ランフラン、ロスラン、アンセルム。

十二世紀には、ギョーム・ド・シャムポート、ピエール・アベラール。

十三世紀には、アルベルトゥス・マグヌスとトマス・アクイナス。

十四世紀には、オッカムとジャン・ブエリダン。

十五世紀には、ピエール・ダイイとジャン・ジェルソン。

十五世紀にスコラ哲学は瓦解した。

### (二) 文芸復興期

十六世紀は中世紀と近世紀の中間期であり、ここでは、モンテーニュをとりあつかっている。モンテーニュは、いうまでもなく、その思想をフランス語で書いた最初の大思想家であり、いわゆるエッセイの初めである。

なお、ここで彼は、モンテーニュの後継者のピエール・シヤロンとフランソワ・サンシエスをあげ、また、ジャン・ボダンについてもべている。

以上、約二十名に近い学者の教説を明細に研究するだけでも、真摯な九鬼の仕事としては、容易なことではなかつたと  
思ふ。

### (三) 近世哲学の誕生

十七世紀からが本当の近世紀であり、彼によれば、フラン

ス哲学は、「デカルトから始めてもいい、又は、モンテーニュから。」(講義六〇頁)といっている。デカルトの合理主義哲学については、「ポール・ロワイヤル論理学」に関する学説のくわしい解説がある。また、デカルトの友人であつたメルセンヌについてもべている。

つぎに、パスカルについては、デカルト、モンテーニュ、およびエピクテートが影響を与えたとしている。パスカルは認識の手段には、幾何学的精神と、細みの精神があるとし、前者によつて幾何学に認識される抽象的論理の領域を、後者によつて情意の世界がとらえられると考へた。幾何学者は明瞭な、粗野な原理に基いて順序正しく推論し証明する。これに反して後者によつてとらえられるものは、甚だデリカートなる事物であるから、事物を突然ただ一目で見なければならぬと考へる。このように幾何学的認識の領域に対して情意の領域を考へ、「われとは何か」の答として、「思惟する蘆」とした。蘆のように弱いが、思惟によつて万物にまさると考へた。(講義六六頁) 九鬼にとつては、数学的認識よりも、それに対する「細みの認識」の世界の方が余程、気に入つていようで、パスカルの「呻きながら索ねるもの」のほかは自分は承認することは出来ぬ」を再び引用している。

デカルトに影響をうけたマールブランシュについては、ここでは省略するが、いわゆるマールブランシュの信奉した機会原因論を掘下げてあることを附け加えておく。

つぎに、デカルトの反対者、ガッサンディや、十七世紀後

半のデカルト派フォントネルや、ピエール・ベイル（後述）についても、ここでは略す。

## 六 九鬼周造の社会学研究

前項でのべたごとく、九鬼周造は、フランス哲学を九世紀から十七世紀までにわたり、研究しているのであるが、十八世紀の部分は、哲学の世紀として、とくに長い部分の研究がある。ここは、フランス社会学の立場からいえば、オーギュスト・コントに先立つ世紀であり、そこに登場する哲学者たちは、社会学の研究にとつても一応検討する必要があるからここで項をあらためて、この期にある学者の所説に関して、彼がいかなる研究をしたかを、かえりみようと思う。

まず彼はフォントネルとベイルをあげている。すなわち、この二人によつて、デカルト哲学が引継がれ、いわゆる啓蒙時代に入つて行くとしている。フォントネルの哲学が実証主義的デカルト主義と呼ばれ、デカルトの唯心論的要素を排除し、実証主義の要素のみを強調したことや、ベイルがデカルトの合理主義から出発し、キリスト教の教義は、すべての点で理性に反すると説いたことなどは、フォントネルとベイルの両者が社会学前史として意義をもつものと考えられる。（講義八三頁―八四頁）

昭和六年、「フランス社会学史研究」を出版された田辺寿利教授もフォントネル及びベイルの研究の必要性を認めておられる。（同書九四頁）しかし、九鬼も田辺氏も共に、両者の

重要なことを指摘するに留つてゐるから、私は別の機会にこれをきわめたいと考える。

とにかく、フォントネルとベイルによつて、デカルト哲学の合理主義的機械論的方面が発展され、十八世紀の啓蒙時代が開かれたのであるが、ヴォルテールがイギリス留学をしたことによつて、ロック及びニュートンの影響をうけ、デカルト哲学のうちにある唯心論的要素に反対して、強くイギリスの経験論の影響をうけたのである。九鬼は、ヴォルテールについては、デカルトとロックを対比してヴォルテールが何故にデカルトを批判したかをのべているのであるが、私は、ヴォルテールが百科全書の編纂に協力した点について関心をもつものである。また、コンディヤックの感覚主義について非常に興味をもつた九鬼は、コンディヤックの「感覚論」を明解に説明している。ロックの経験論の影響によつてコンディヤックが、すべての認識は外的経験たる感覚から生ずるとのべたことは、デステュット・ド・トラシイや、メーヌ・ド・ビランに多大の関心をはらつてゐる九鬼が、そこまで溯つたことは当然であろう。九鬼哲学における心理学的な傾向は、その源流を、このあたりに求めることができると思われる。

現代フランスの社会学者キュヴィリエは、モンテスキューを眞の社会学者といつてゐるが、社会学といへば、オーギュスト・コントが祖であると考へられてゐるのが普通である。コントが社会学という名称を用いたのがその大きな理由である。

いつたい、モンテスキューの研究業績の社会学史上の意義については、すでに、デュルケームがのべており、私は、一九五三年初版のデュルケームの書「モンテスキューとルソー」によつてそれをしつたのである。もつとも、デュルケームの「モンテスキューの復活」については、前述の田辺寿利教授がすでに、指摘されたことがあるが、デュルケームの「モンテスキュー」は、元來、ラテン語で書かれてあつたので、私など知る由もなかつた。右のデュルケームにより、また、キュヴィリエにより（これはキュヴィリエ著「フランス社会学よ、どこへ行く？」にのつている）、フランス社会学の先駆者としてのモンテスキューの社会学者としての存在をしつたのであつた。

さて、九鬼もモンテスキューについては、つぎのごとくのべている。

「法の精神」は、一七四八年にモンテスキューが数え年六十才の時に出たが一年半の間に二十版以上に上つた。そして当時の人がこの書は学者達の書齋にもあるが社交界の淑女紳士達の化粧台の上にもあるといつている。（講義八九頁）

諸国民の特殊性とその歴史の意義を認め、諸国民の法律制度を地方の地理的条件と民族の社会的条件とから導出しようとして試みたことは、キュヴィリエもいうごとく、モンテスキューは社会学の先駆者として考えられるばかりか、実にわれわれが社会学の研究対象として取扱つてゐることを扱ひ、またそれを社会学の説明によつて行つてゐる（「モンテスキューと

ルソー」の序文より）のであつて、デュルケームの社会形態学の発想は、実にこのあたりに端緒を求めることができると考えられる。

モンテスキューが法律の原因を合理的普遍的原理に求めず、その土地の気候、地味、広さ、人民の生活状態、宗教、性情、貧富の程度、人口、風習など歴史的に決定される条件に法律の原因を求め、国民性の意義を十分に認めてゐることなど、二百年後のこんにちにおいてすら、意義をもつてゐると考えられる。なお、モンテスキューの三権分立論は実は、ロックの政治学の影響であるが、その源は、アリストテレスの政治学まで溯ることができるとは忘れてはならない。

つぎにルソーについては、もし、啓蒙といふことを狭義に解し知識万能主義とするならば、ルソーは感情主義を主張した点で、啓蒙の反対者となり、むしろ啓蒙への反動という立場であるから、十八世紀哲学において、特殊な位置を占めてゐることになる。（講義一〇〇頁）とのべている。

ルソーの「社会契約論」は、国家論、政治論であるが、問題と方法は、モンテスキューのばあいとルソーのばあいとは違つており、モンテスキューは既成の国家制定法を問題として扱つた。これに対してルソーは法の原理を問題としたのであつた。社会契約は必ずしも歴史的事実であつたといふのではない。かくあるべきだといふ標準と考えるべきである。（講義一〇三頁）

たゞ、後にデュルケームが、モンテスキューを社会学の先



馱者と附題して論文にしたと同時に、ルソーについても別に論文として書いているのを見ると、そこでは、ルソーのいう一般意志が、個々人の意志の総和以上の力をもつているところに、とくに興味をもつたようである。(デュルケム「モントスキューとルソー」一一五頁以下)

九鬼は、ここでルソーの「学問及び芸術論」や「人間不平等起源論」とくに、「エミール」について、くわしい解説を附しているが、ここではその努力に敬意を払うことに留めておく。

また、百科全書家としてのデイドロ、ダランベール、テュルゴー、コンドルセーについては、私の研究上の都合から、他の機会に譲りたい。

また、ダランベールの弟子であり、オーギュスト・コントの師であるサン・シモンについても、これは、田辺教授もいつておられることであるが、従来の社会学では、コントの研究にいそがしく、とかく、サン・シモンの研究はなおざりになつてゐる傾向があるのではないだろうか。サン・シモンこそ、十八世紀の百科全書主義者からコントの実証主義哲学への橋渡しをした人なのである。

## 七 九鬼周造の社会学研究 (その二)

以上が九鬼の「現代フランス哲学講義」四章のうちの三章までの部分と関連しているところである。最後の章のテーマは、「現代のフランス哲学」であるが、ここは、オーギュス

ト・コントによつては定められている。すでに、私が科学論の項でのべたごとく、科学に対する哲学の態度としての三つの態度がある。

(一) 科学の成果の綜合が哲学である。

(二) 科学の価値、限界を批評するのが哲学である。

(三) 科学の領域を超えて哲学の領域がある。

コントは、右のうちの(一)にあたる実証哲学を展開したわけである。九鬼ののべていることのうちで、とくに私の注意をひいたものは、コントの実証的精神が単にそれ以後のフランス社会学に影響を与えているばかりでなく、フランス哲学にも多大の影響をもつことを指摘している点である。

九鬼によれば、これには二様の關係がある。(一)は、コントが数学及び自然科学に偏して思索した点に対して、その後の形而上学が反対したことであり、(二)は、コントの実証的精神そのものをその後の形而上学が取入れたことである。(講義一三一頁)

もつとも、この二つは程度の差であり、数学、自然科学方能に偏することは反対するとしても、実証的精神というものは否定してしまふわけではない。

たとえば、ベルグソンを例にとると、コントの実証主義を外的実証主義とすれば、ベルグソンは、内的実証主義といえるわけで、自然科学の領域以外に形而上学的な自由な境地を認めるのである。「真の経験論は真の形而上学である」というベルグソンの言葉は端的にそれを表明しているものと考え

られる。

また、ドイツの代表的哲学と考えられる現象学も、これを建設したフッサールの師ブレントラーノが、そもそもの現象の概念をコントの影響によつて心理学に取入れたのである。従つて、フッサールの現象学はコントの流れを汲んでいるとみる事ができる。(講義一二九頁) 私は現象学はドイツ的な哲学だと考えていたので、キュヴィリエとギュルヴィツチ論争に關する拙論文(「成城教育」三号)で、ギュルヴィツチを他国者(非フランス的)あつかひしたのであるが、ここで九鬼から教えられるところ大であつた。

コント社会学については、ジャン・ラクローワもいふごとくコントにもつとも影響を与えたその師サン・シモンはいうにおよばず、ド・ボナルド、ド・メーストル、モンテスキュー、コンドルセなどの研究、つまり、コント社会学の建設に影響を与えた先駆者達のことも大切であるが、それと同時にコントによつて影響をうけた人達の研究も重要だと思ふ。ジャン・ラクローワの「オーギュスト・コントの社会学」は一九五六年初版であり、私のしる限りコント研究の最も新しい書物である。わが国の社会学者のうちには、いまごろ、こんな本が——と驚く人もいるかもしれない。

さて、九鬼は、コントの諸著作と真正面から取組んでおり、夫々について解説を附しているが、ここでは、それはのべる必要もない。たゞ、私は九鬼がコントについて、つぎのことを結論しているのに注意をはらうものである。

コントが人間教の思想に到達したということそれ自身は決して無意味なことではない。実証哲学の綜合としての哲学も結局は形而上学の世界に行かなければ止まないということ。生の体験が、哲学思索の根底となる(これは、クロテュルド・ヴォーとの恋愛のことを指している)ということ。

この二つをコント哲学からの教えであるとし、コントの生涯のいわゆる第一期と第二期とを合せて初めて完全な姿を示すものとのべている。(講義一三四頁—一三五頁)

ここにおいて、九鬼はすでに、コントの生涯の第二期の結果、コントの実証哲学が科学の綜合を哲学の本質であるとすることを超えて、九鬼のいわゆる第三の立場、すなわち、「哲学は形而上学である」に指向していると考えているようである。つまり、ベルグソンの内的実証主義の起源を、ここに見出している。

## 八 九鬼周造の社会学研究 (その三)

コント研究を以上で終えた九鬼は、実証的精神の尊重によつて、社会学と心理学が発展したとのべている。

もちろん、コント自身は、心理学の学問としての独立を認めなかつた。それは、生理学の一部、社会学の一部として論じたのである。しかし、コントの影響をうけたテーヌとルナンはそれ以後の心理学に直接影響するところ大であつた。

テオデュール・リボ、ピネ、ポーラン、ピエール・ジャネ、ジョルジュ・デュマの五人の学者の所説について、深く

研究しているが、これらの心理学説は、やはり九鬼の形而上学に大きく影響しているとみるべきであろう。

九鬼は、フランスの社会学を三つの学派にわけている。

(一) 生物学的社会学、(二) 心理学的社会学、(三) 現実的 sociology がそれで、(一)には、エスピナスとル・ボンを、(二)にはタルドとラコンブを、(三)には、デュルケムをあげている。

このわけかたのうち、(一)、(二)はむしろ(三)と対比すべきであり、前者としてタルドを代表とし、エスピナス、ル・ボンを、後者に、デュルケムと考えてよいと思う。

また、デュルケムの弟子たちのグループ、いわゆる社会学派またはデュルケム学派として、アンリ・ユベール、マルセル・モース、ブウグレ、レヴィ・ブリュール、シャルル・ラロの五人をあげている。

しかし、この部分は、もっぱら単行本によつてそれ／＼の学派に関する解説がのべられているのみであり、エスピナス、タルド、デュルケムは各々相当数の研究論文が出ているし、デュルケムの主宰した社会学年報などは、九鬼の滞仏中、当然出版されていたにもかかわらず、一言も触れていないのは、九鬼の学風によるものといわざるを得ない。

このように、九鬼は、コント哲学の研究によつて出現したフランス社会学よりもむしろフランス心理学の系譜にウエイトをおきつつ、科学批判の哲学としては、シャルル・ルヌヴェイエを研究し、さらに、ルヌヴィエから出たクロード・ベルナールについてのべ、また、タルドの師クルノーについて詳

説している。

九鬼は、ここでも、ルヌヴィエは哲学の任務が批判にあるとして新批判主義を創り、現代の合理主義哲学の基礎をなしている点を、コント哲学が科学の総合から一種の宗教に到達したのと軌を一にしたとみなし、哲学の本質は、その根本的動向において、形而上学に行かなければ止み得ないといつてゐるのは、九鬼が、フランス哲学史の流れからいよ／＼独自の方向を発見したものである。

## 九 九鬼哲学の帰結

### ——新しい形而上学

私は以前、九鬼哲学は、ベルグソンの哲学を、日本文化にアプローチしたものであるとばかり考えていたのであるが、こんどの「現代フランス哲学講義」を読むことによつて、そのように簡単なものでないことがはつきりとわかつた。

九鬼の第三の立場、すなわち、新しい形而上学では、その最も主な源流を、コンディヤックの感覚主義からメーヌ・ド・ピランを経て、ベルグソンに求めているといえよう。

九鬼はメーヌ・ド・ピランを形而上学の先駆者とし、ピランについて、つぎのようにのべている。

ピランの哲学は要するに内生の観察に基づく形而上学である。その哲学の問題は彼自身の体験にその根拠を有している。ピランの日記によつてしられるごとく彼は極度に鋭敏な官能をもつていた。あらゆる感覚的事物から深い印象と影響

とを受けた。それと同時に強烈な意志の能動性を感じた。

ピランの研究生活は、生理学時代（三十九才まで）、心理学的形而上学的時代（三十九才—四十九才まで）、宗教的時代（四十九才—五十八才まで）の三時代にわけられる。

コンディヤックの感覚論は吾人の認識が事実に基づかねばならぬことを説いた。又、一切の事実が還元さるべき原始的事実の存することを説いた。たゞ感覚論者は感覚をもつて原始的事実と見做す場合、単に感覚のみでは認識が成立しないことに気付かなかつた。又、感覚に他の要素即ち動的性格が加わらねばならぬという積極的の事実を認めるに至らなかつた。（講義二六五頁）

右の九鬼の言葉は「いきの構造」の源流を、まことにはつきりさせてくれるものである。

つぎにベルグソンについては、つぎのような表現がある。

ベルグソンは哲学の「革命者」として且つ「新哲学」の創始者として許される。エミール・ブートルウの弟子として高等師範に学んだ。

ベルグソンが力説するのは一切の理論を忘れて現実に直面することであり、哲学者間の議論をしらない一つの精神の見地にわれわれを置こうとするのである。すなわち、哲学を学派から脱出させて、生に近接させるといふ。もうひとつ、ベルグソン哲学的内容的なこととしては、思惟の映画的機構に反対し、直観の方法を立てること、直観が真の实在を示すのである。形而上学は分析に甘んじて相対の中に止まつてはな

らない。科学的認識はすでに存している概念による認識であつて、象徴的認識であり、形而上学は象徴を必要としない。科学は、ある事物を自己でない他のものの機能によつて表現する。従つて相対的である。これに対し哲学的認識は直観的認識である。

さて、私にとつては、いつも、この直観ということが、なか／＼わかりにくいことなのであるが、九鬼は、直観的認識によつて動いているものの中へ身を置いて、事物の生命そのものを自分のものとする。そういう直観は絶対者に到達する。哲学は実証科学の経験的成果の全体を必要とするのべにている。

## 十 結 論

以上、私は九鬼周造とフランス社会学について所論を展開してきたのであるが、ここで一応つぎのことを結論とした。

九鬼哲学——それは新しい形而上学であるが、その背後には、フランス哲学の伝統が秘んでいる。この事實は、「現代フランス哲学講義」を読むとき、もはや明白である。

とくに注目すべきことは、その哲学研究の目標が現代的課題に答えようとするところにあることで、すでに本論のはじめでのべたごとく、「我々は何等かの意味で現代の問題に悩むへなければならぬ。哲学を研究するものは現代の問題に悩むものでなければならぬ。さうして一方に現代の哲学上の問題

が哲学史の背景なくしては理解出来ない様に、他方には又現代の哲学問題の理解を有たなければ哲学史の攻究は徒勞である。」という彼の言葉は、社会学研究者にとつても銘記すべきことであると思う。

つぎに、私は彼の科学論の深さに興味をもつ。すなわち、科学論を彼は三つに分け、オーギュスト・コントのごとく哲学を諸科学の総合として実証哲学体系を建設した第一の立場、シャルル・ルヌヴェイエのごとく、哲学は諸科学の総合ではなくて、その批判が任務であるとした第二の立場、最後に哲学の本質は諸科学の総合でも、批判でもなく、その両者第一と第二の立場をあわせて、さらにそれをのりこえたもの、すなわち、メーヌ・ド・ビランを先駆者とするような形而上学でなくてはならぬという第三の立場を終局の立場としている。

普通、社会学においては、オーギュスト・コントの第二の生涯（後半生）は、コントの主張する実証的精神の否定であるとされているのに対して、九鬼は、そこにコントが哲学の本質を諸科学の総合とした前半生の主張をのりこえて形而上学の方に目指していったものと解釈していることは面白い。

さて、九鬼が、「現代フランス哲学講義」で主張した第三の立場が、そのフランス哲学史研究の成果としてでてきたことは確かであるが、直接影響しているのは、コンディヤックの感覚論、メーヌ・ド・ビラン、そして、なかならず、ベルグソンの内的実証主義の形而上学であろう。

ベルグソンについては、ハイデッカーと共に、九鬼の滞欧中の最大の師といつてよい。事実、彼はベルグソンをデュルケームと共に二十世紀になつてフランス哲学界での最も偉大な大立物といつている。（講義一六一頁）

「いきの構造」に現われた九鬼哲学の精神は、右のような哲学史的背景によつてはじめて生れたものである。

私は、社会学研究をするばあい、このような九鬼周造の研究業績から教えられるところが甚だ大であると思う。

また、私は、オーギュスト・コントの実証的精神が、フランス社会学をつくりだしたのみでなく、フランス哲学、フランス心理学にも多大の影響を与えていることをしつて、大いに参考になつた。

九鬼周造のかつて住んでいた麴町三番町の家、永田町の家は、今度の戦災ですでになく、また、大磯の宏大な別荘もすでないが、このような、社会の変動によつても、彼の偉大な哲学精神は何等消滅することなく、永遠にわれら研究者の前途にすばらしい光明を与え続けてくれるであろう。

(一九五八・一・三)